

〈翻刻〉『伊勢物語当流私』（一）

坂本，信道
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/15485>

出版情報：文献探究. 23, pp.30-47, 1989-03-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



〈翻刻〉『伊勢物語当流私』(一)

坂本信道

〔凡 例〕

- 一、九州大学附属図書館蔵『伊勢物語当流私』(五四五・三五)上下二冊を翻刻する。原本は、縦二五・六センチ、横十七・六センチ。墨付上巻七十四丁、下巻九十丁。一面十一行、和歌は二字下げ二行書き。
- 一、下巻末に、「寛永十三年(一六三六)極月十九日二書畢」とある以外、書写者・書写状況については不明である。
- 一、翻刻にあたっては、用字・仮名遣は原本に忠実であるようにつとめ、不審と思われる箇所もそのままとした。ただし、字体は常用のものに改めた。
- 一、虫損等により判読の困難な箇所は□で表し、一部補読した。
- 一、定家本の章段による見出し番号を付し、また私意に句読点を施した。
- 一、改訂は「で示した。たとえば、「¹²³」とあるのはそこまでが十二丁裏であることを示す。
- 一、本文と別筆の書き入れは掲げなかった。

翻刻 過去人はおほくありといへとも、なりひらをむかしおとこといふ事、一せつ二てうのきさきをおかし奉るゆへ、えいりよにふかくそむく間、なりひらといふなのりをはかり昔おとこといふ也。また一せつには、なりひらしやうわ八年三月廿一日にけんふくの日をとりあてゝ侍る間、むかし男といふ也。廿一日とかきて昔とよむ故也。又一さいの物かたりのはしめに、むかしといはてかなはぬ也。しかれば、むかしかかる男のあり

つるといふへきために、むかしおとこといふ也。うみかふりと
は、なりひら十六のとし¹²³「かふりをきそめてけり。しから
ば、しよくわんとかきて、うみかふりとよむ也。此ときはさこ
んのしやうけんといへる也。ならのきやうしるよしとはちきや
うのよし也。是はなりひらせんそよりつたへる地行なり。かり
にいにけりとは、たかかり也。おとこになり、かどくになをる
に、ちきやうとはかりいひつたへて、こさい知らぬもしとけな
し。又しさいたつぬるも、くんしのいをさくるなれば、たかか
りとこうしてくたれば、ひけうにはなくして、さいしよのつも
りを心得る也。いつれのくんしのたかにすかるゝも此心也。い
となまめいたる女とは、ありつねのむすめ也。はらからすむ
²「とは、きやうたいすむ也。此おとこかいま見てとは、此女
をかきのひまよりなりひら見はしめられたり。おもほえすふ
さとにとは、わかちきやうにもかかる女のありけると、中将を
とろかれたり。いとほしたなくては、はした物にはあら
す、くらいあるおんなゝれば、りんたん²にいても人のしらぬは
ことほり也。心ちまとひにけりとは、ちうしやうのかくこたへ
いるはかりに此女を見せめられたり。かりきぬのすそをきりて
哥をかくとは、たかかり俄なる事なれば、りやうしもとゝのは
されは、かりきぬのすそにかゝれたりとおほへたり。口伝に云、
²³「かの女のかたへふみをしたゝめ、なりひらといふなのり
をかくへきとおもはれつるか、女は心ふかきやうにてしとけな
き物なれば、ふみはふんちつある物なり、なりひらとなのりを
かきては、ちむしやにおよはす。又女にははからぬてきの侍れ
ばなのりをさしおき、いるいのをもつてなりひらとしられへ
きたために、かりきぬのすそをきりておひにつけて此哥をかき
てやられたり。しのふすりのかりきぬとは、紋にしのふをつけ

たるかりきぬ也。

かすか野のわかむらさきのすりころもしのふのみたれかき
りしられす^②。

五もしにかすかのとをかれたるは、ならのきやうにてよむ哥な
れは也。女をわかむらさきにたとへたる事也。まついるは五も
しにきもちいたる物也。五色のほかなれば、女もかくのこと
く、女はけいつをもつたへぬ物也。ゑんにまかせて、たかきい
やしきにさたまらずきる物なれば、むらさきにたとへたり。
今日此女を見はしめてより、忍ぶおもひの心のみたれかきりし
られす。うちつけよりかくのことくみたれては、わか心すゑに
はいかはかりみたれへきと、此女にわかおもひをつけられたり
をひつきてやるとは、たうりうには、かいま見てそのまゝ哥を
③「うちへやりたるによりて、おつつけといふへきを、おい
つきてといへる也。こちうのせつには、かすか野の哥は、かり
きぬのすそをおひにつけて哥をかきおくと也。なりひらの
かすかにておひつかれたる事也。しうけん也。つらゆき此事を
哥によめる。

たな引ておひをそつけるかすか野のわかむらさきのころも

かりかね

かりかねのおほく行は、おひをつきたるやうなり。又なりひら
かすかにておひをつきたるなれば、つらゆきかくのことくよめ
る。つあておもしろき事とおもひて、きのありつねのむすめ、
かわらの^④「左大臣のよまれたる哥をとりあはせて返哥にを
よふ。

みちのくのしのふもちすりたれゆへにみたれそめにし我な
らなくに

これはなりひら、しのふのみたれかきりしられすとよまれたる
を、此女、われゆへに心のみたるといふはいつわり也、たれ
ゆへにかみたれにし、われにてはあらしといふ事を、我ならな
くにと、いかにもけんそに返ししたり。いちはやきとは、さう
そくとかきたり。みやひは、やさしき也。十四、十五の女の、

ほんかをとりあはせ返事をしたるは、ま^⑤「ことにいかにも
さうそくにやさしき心はへをあらはしたり。

辨

辨 ならのきやうはなるゝとは、くわんむ天わうの御時、

ならの京をすみすて、たいらのきやうへみやこをうつされける
事を、ならのきやうはなるゝといふ也。此きやう人のいゑさた
まらすとは、みやこうつりのはしめなれば、たいりも人のすみ
かもとのはさる事也。にしのきやうとは、なかをかのこと也。
たいらのきやう人のとのはねは、まつみかとなかをかに三
とせすみ給ひし也。しかれば、みかとのましますところ、きや
うといはてかなはさ^⑥「る也。なかをかといふへきをにしの
きやうといふ也。此女は二てうのきさき、なからきやうの御
むすめ也。よひとにはまさるとは、きさきの御くらいよひとに
は似す。これはくらみをほめたる事。女は又くらいよりもかた
ち心をほむる物なれば、さてこそ、そのひとかたちよりは心な
んまさと、きさきをいなくほめたてまつる也。ふんしうに
いはく、かたちにはふつうあり、心にふとうなし。かたちはた
かきによらず、そめんなる物もあり。こころはくらいほとさ
まりたる物也。ひとりのみもあらさりけらしとは、これはせい
わ天わうのきさきに^⑦「さたまり給ふ也。まめおとことは、
まことのおとこといふ事也。うち物かたらふとは、ものこしに
御ことはなとかつりたるは、きさきの、なりひらに御ことはを
かはされたり。これよりして見はしめたてまつり、かへりてと
は、大りよりしゆくしよへかへりたる事也。きさきのおもかけ
をわすれかたくおもひて、やよひのついたちあめそをふるにと
は、雨のつよくおちそひくふる事也。

おきもせすねもせてよはをあかしては春のものとてなかも
くらしつ

おきもせす、ねすは、よるひるのおもひふかければ、^⑧「お
きもせす、ひるの事也。ねもせぬはよる也。おもひにあくかれ
は、おきふしもならざる事也。みかとはをるのみやと申奉るに
より、みかとのきさきとはかりなかくくらししてよりそふ事なき

を、春の物とてなめくらすといへる也。かくのことくかなはぬ事に心をつくすは、こひのみのならひ也。

第三段 昔おとこけさうしける女とは、おもひかけたる女の事也。これは二てうのきさき也。ひしきもといふ物をやるとは、かいそうにひしきといふ物あり。是をきさきへしんする也。さまをかへいくたひ物をおくるによりて、あしき物よき物をきはすしん^⑤。するは、ふかくおもひ奉るゆへ也。又一せつには、女のまへは、からふみのそうしやは、人しりよするによりて、なにても物をそゆれば、なかつちはやし。此きにまかせて、ひしきによらず、なにてもふみにそへられたり。

おもひあらはむくらのやとにねもしなんひしき物にはそてをしつゝも

むくらのやとは、人のいていりあるましき所也。しかれとも二なくおもひあらは、むくらのやとなりともねもしなんといへる也。かゝるところはしき物もあるましければ、ひつしく物にはそてをしつゝも^⑥。「おもひあらはねもしなんとよめる。むくらのやとなりひらゆくへきと、ひけしにはあらず、ほんかにも見えたり。なにせんにたまのうてなも八重むくらはひらんやとにふたりこそねめ。かくのことくむかしもいへり。二てうのきさきたたふ人にてましますとは、くらいにもつかてへい人の御ときなり。

第四段 おほきさいのみやおはしますとは、そめとのきさき、せいわ天わうの御はなり。にしのたいにすむ人あるといふは、二てうのきさき、たうくうの御すまひにて、くらいにもつかせたまはすして、かん^⑦。「この御すまひなり。ほいにもあらぬとは、ほんいにはあらざる也。なりひら、二てうのきさきへみつたう申也。しからはほいにはあらぬ也。心さしふかきとは、こひのみちをなかつちとする也。む月の十日はかりは、正月也。ほかにかくるゝとは、にしのたいに二てうのきさきおはしつるか、大りに御うつりまします事、ほかにかくるゝといふ也。ありところはきけときんちうの事なれば、行かよふへき事にもあ

らす。又のとしのむ月とは、二年めの正月也。かのきさきのましましたるにしのたいを、せめてきさきの御かたみに見てなくさみたけれど、^⑧「これもさいくいていりせはあたたつるへし。梅の花さかりに、むめをかことにてにしのたいを見る也。はなはいかやうに見ても人のとかむるにをよはず。遙見人家花便入、不論貴賤与親疎をかくのことし。しからは梅の花をかことににしのたいのいていり、なもたゝさる也。いきてとは、にしのたいへゆく也。たちてみてみたとは、にしのたいへまいり、きさきとむかひ奉りつるまねをして、たつついづなけく事也。しかれともきよねんに似ぬとは、きさきもましまさるゆへ也。あはらなるいたしきとは、けんそうくわうてい、やうきひにわかれて、きひ一人なければ^⑨。「くうてんらうかくにあらずとなけき給ひしことく、なりひらも、たまのうてなもきさきましまさねは、あはらなるいたしきとおもひたるもことはり也。月のかたふくまでふせりて此哥をよむ。

月やあらぬ春やむかしのはるならぬわか身ひとつはもとののみにして

是はけんそうくわうてい、やうきひにわかれての御ことには、やうきひ一人なければ、月も月ならず春も春ならずと御なけきのことく、なりひらも、きさきのましますときは月も月なり、花のはるも春也、いま此にしのたいはきさきましま^⑩。「さねは、月やあらぬといへる也。又はるも春とおもはずなみたをそく也。かくのことく月も花もむかしにかはるに、わかみはかりありかきもなくむかしのまなれば、わかみひとつはもとの身にして、月も花も昔ならぬと、なりひらのなけきことはりなり。

第五段 五てうわたりにいとしのひて行とは、なからのきやうの御もとにきさきのましますほとに、こゝへ忍ひてゆく事也。いとしのふとは、二となく忍といふ事也。みそかなるところとは、いかにみそやかなる所也。是はなからのきやうの御事なれば、^⑪「くわんはくのすみかにて、いかにみそかにすま

るなり。かとりよりいらて、わらはへのふみわけたるついのくつれより、ゆきかよふ也。此かよひちは、人のゆき、もしけくなければ、なりひら一人かよふ也。しからは、たひかさなれはあるしき、つくとくとは、なからのきやう、なりひらかいて

人しれぬわかかよひちのせきもりはよひくことにうちも

ねな

うちもねな、んは、うちもねよかし也。わかかよひちのせきもりなれば、よくもねいたりとも。⁽⁹²⁾「さたする物あるへからす。しかればよひくことにせきもりもねよかし也。あるしゆるしてけりとは、まことにゆるすにはあらず。哥にはおにかみもやはらくといふ事侍れば、ちうしやうわかかよひちのせきもりとよまれたるを、なからのきやう此哥にやはらき給ふゆへなり。せうとたちとは、きさきの御きやうたい也。此せきもりをよにんにいひつけらるれば、きさきのなもたつほとに、きやうたいたちせきもりとなり、ついにたつれたる也。

女メのえうましかりけるとは、ゑかたき女なり。是は二

てうのきさきに、なりひらけねんをかけしに、⁽¹⁰²⁾「きさき

のくらいになり給へはなりひらゑかたきなり。としをへてよはひけりとは、としをへて忍ぶ心也。からうしてぬすむとは、しんらうの事也。いとくらきにきけるとは、よるの事也。又きさきの事なれば、せちやうのおそろしき事をも、くらきといふ也。あくた川は、きんちうにあり。くさのうへにきたるつゆとは、きさき、いまたほかを御らんせずして、まんきちやうのうちにこもり給ひしゆへ也。はしめてこよひくさを見給へは、まへくくさはを御らんしなれさるゆへ也。ゆくさきおほくとは、ちうしやうのすみかまてはるかななり。⁽¹⁰²⁾「しかればよもふくる。きさきは御ともしたり。なりひらせんかたききに、きさきはくさのうへにきたるつゆをとひ給へは、なりひら、なんきのちふんなれば、へんたうにをよはす。おにあるところともしらぬとは、きんちうにおにのまといふところ、ねんちうに一

たひせちふんの夜よりほかは人ゆかす。しかれともなりひら、これへきさきをかくし申ゆへ也。かみさへいみしうなるとは、らいてんの事にはあらず。きさきのうせ給ひたるによりて、きんちうさはきつうようする也。かのあはらなるくらは、おにある所也。かのところにきさきをしかくし、⁽¹¹²⁾「申也。おとこゆみやなくいをきてとくちにをるとは、此きさきをとりれしとちうしやうの心のいかる事を、ゆみやなくいをおほふとかきなしたり。きんちうはゆみやなくいいる事なし。おにはやにくちにくふとは、おにのまにおき奉きさきを、ものゝふ共とりてかへれば、きさきうせ給ひし也。しかればおにのま一くちにかまゆるによりて、をにはやくいてけりといふ也。あなやといひけるは、きさきもなりひらも、あなかしとなけき給ふ也。かみなりさはきに、えきかざる也。かみなりさはきは、つはものをつうようする也。此さはきによりて、なりひら、二条⁽¹¹²⁾」のきさきのなけき、たかにきこへす。あしすりをしてなくとは、なりひらふしまろひきさきのわかれをなけくなり。

しらたまかなにそと人のとひしときつゆとこたへてきえなまし物を

たうりうのせつには、くさのうへにおきたるつゆはなにそと、きさきのと給ひしとき、つゆとこたへて消はつへきを、なからへて此わかれを見る事よと、こくわいの心をつゆとこたへてきえなまし物をといへる也。こちうのせつには、み人むまれたる時たまのこくと人にいはれしとき、なにの心もなく、⁽¹²²⁾「きゆへき物を、かゝるとしまてなからへうき事を見つる、あさましきとくへてよめる。

いとこの女とは、そめとのゝきさきに、つかうまつるやうにてい給ふとは、いとこなからせうとはゝにてましませは、おそれ給ふ事を、つかうまつるやうにてとあり。かたちのめてたくましますとは、きさきの御かたちたくひなき也。おいていつるとは、きさきをうしろにおひ奉るゆへ也。御せうとは、きさきの御しやきやうなり。おととは、なへて大しんのからなを

いふ也。御なをはくにつねと申。大なこんまたけらうとは、大納言のくらしいになるへき人、くらしいにつき⁽¹³²⁾「給はぬを、下らうといふ也。しかればかのくにつね御子ともからなれば、うちへまいり給ふとは、きんちうのきさきの御さところへ御まいり也。いみしうなく人あるとは、そめとのきさき、二てうのきさきをなりひらにとられ御ひたんの事也。それを大なごんき、つけ給ひて、おにのまにましますきさきととり給ひければ、それをかくおにといふ也。きさきのまたわかくとは、おさなき事也。

第^二段 むかしきやうにありわふるとは、えいりよにそむくあひたみやこのうちにすみかたし。あつまへ行とは、とうりうには、しきにおんこくの事也。⁽¹³²⁾「こちうには、ひかし山にいたる事をあつまといふなり。まつひかしへ行は、いせ、おはりをとをるなればほんのまゝ也。なみのいとしろうたつを見て、うらやましくもかへるなみな、波はかへる、われはこめんあつてみやこへかへるへき事ふちやうなり。しかるにうらやましくもかへるなみなとなり。

いとしくすきゆくかたのこひしきにうら山しくもかへるなみな

猶又こちうのせつには、いせ、おはりといふ事、二てうのきさきの御きやうたいくにつね、もとつね、くにつねをはいせのかみ、もとつねをはおりのかみ也。此ふたり⁽¹³²⁾「のあひたになりひらかくれすむ也。しかれば伊勢、おはりとかきたり。なみのいとしろうたつは、人のいちやはくはつといへるも、物おもふときよりもおこりたり。すき行かたのこひしきは、これは物ことに昔をおもひいたす事かすく也。うら山しくもかへる波とは、おいの波はかへる也。われわかきにかへる事なければ、うら山しくもかへる波かなとよめる。

第^三段 きやうやすみうかりけんとは、もとよりえいりよにそむくゆへ也。ともとする人ひとりふたりとは、きのありつね、たいらのさたふん、りやう人なから、なりひらのえいりよにそ

むかるゝをあはれまるゝ事⁽¹⁴²⁾「なれば、かくのことく一人二人といふ也。しなのゝくにあさまのたけにけふりのたつを見て、

しなのなるあさまのたけにたつけふりをちこち人のみやはとかめぬ

わかむねのうち、みやこにしなゝのきやしや、ふうりうの人のことおもへは、ふくちうのもゆる事、あさまのたけのけふりにをとらす。あさまのけふりをは、おちこち人いかなるいはれととかめてとをる也。わかふくちうのもゆるをは、えんきんしたしき人も、まことのときをはとかめてたつめる人なし。さてこそおちこち人のみやはとかめぬと、あはれまぬと⁽¹⁴²⁾「うらみてよめる。

第^四段 もとよりとんとする人とは、ありつね、さたふん也。みちしれる人もなくて行とは、あつまはをんこなれば、せいたうをおこなふ人もなければ、しゆきやうのみはよこしまなる事もやあらんと心ほそくと也。こちうには、さまゝのおもひあるといへとも、こひのみちほとあはれなる事なければ、こひのみちは人のにくむにてとて、ふひんともなきを、みちしれる人もなくてまよふとをく也。みつゆくもてとは、くものては八ある物也。しかれば此みつ八人のきさきにわかれしなりひらの、な⁽¹⁴²⁾「みたのみつのこほるゝを、みつゆくかはのくもてといふ也。はしを八わたせるとは、なりひらなれにし人はあまたあれとも、まつ八人へつしておもふ人あり。そのわかれをおもひわたるといふ事を、はしを八わたせるといふ事也。八人の女のしたい、二てうのきさき、きのありつねのむすめ、こまち、いせ、たかやすの女、つくもかみ、そめかはの女、すきこ、八人さたむ也。そのさはのほとりの木のかけにをりあてとは、たひの事なればおりいてあそふていなり。かれいひくふとは、たひにてくふいひをは、かれいひといふ也。やかてもちには、せうはんとかきてかれいひとよ⁽¹⁴²⁾「む也。たひにてことたらぬを、たひのならひとしたり。此すくなきひを、なり

ひらきのかけにてくふ事、これところをきはすかれいひくふは、たひのならひ也。昔かうとくのみやも、あふみのくにかいつにおゐて、せきやうとこひ給へは、かいつのももの、かうとくのみやを見奉りて、つねのきもつにはあはすとて、しいのはいひを奉りければ、かうとくのみやの御哥に、いゑにてはけにくふいひをくさまくらたひにしあればしいのにもとあそはしたり。しかればなりひらか、きのかけにていひくふ事、ひきやうにあらず。けにくふいひとあ⁽¹⁶⁵⁾そはしたるは、しゆくしよにをゐては、とつへてけつかうなるいひをけにくふとあそはしたり。たひなればしいのはにくふと、あはれにあそはしたり。ある人のいはくとは、みかわのくにの物の事にてもあるへし。又一人二人のありつね、さたふんか事にてもあるへし。かきつはたといふ五もしを句のかみにすゆるとは、哥は五くの物なれば、一字つゝ句のかしらにをく也。かくのことくよむを、おりくのうたといふ也。

からころもきつゝなれにしつましあればはるゝきぬるたひをしそおもふ⁽¹⁶⁶⁾

から衣は、いるひにとりてもいちやうなり。かくのことくから衣きつゝなれにし、きやしや、ふうりうのつましみやこにあれは、あとに心のひかるゝによりて、一ほもさきへすゝむ事、心にとらす。さてこそ、たひははるゝきぬるをよろこふに、是はたひおしそおもふと、みやこに心のひかるゝゆへなり。なみたおとしてほとひにけりとは、なりひらかくのことくよまるゝ哥をきつゝさきへゆく事をやめ、なりひらをとゝめたる事を、ほとひにけりといふ也。わかいらんとするみちほそきとは、一天下ひろしといへとも、えいりよにそむけは、みのをきところせはき也。うつ⁽¹⁶⁷⁾の「山の事なれば、つた、かえてのはしけるとかきたり。すゝるなるめを見るとは、おもひのほかなるをんこくなりとなりひらなけるゝ也。しゆくやうしやあひたり、此しゆくやうしやは、二てうのきさきの御しやてい、れんしゆくほうし也。かかるみちはいかてかいますとは、しゆく

やうしや、なりひらをみて、かゝる御やうたひあはれなりと、なりひらをとふらふ心也。きやうにその人の御もとゝは、二てうのきさきの御もと也。ふみかきてつくとは、二てうのきさきへ、かのしゆくやうしやに、なりひらふみをまいらせらる。

するかなるうつ⁽¹⁶⁸⁾の山辺のうつゝにも「ゆめにも人にあはぬなりけり

きさきにわかれ奉りてのちは、いかやうのものにも、われふしゆくすると、御きしんあるへし。うつ⁽¹⁶⁹⁾の山辺のうつゝにも、よの人にはあはぬ也。かりにゆめにもうつゝにも、きさきよりほかは見奉らすと、きさきへわか心のとうかなきをしらせ奉哥也。又一せつにいはく、われ二てうのきさきにさんくわい申さる事は、ゆめにもうつゝにもなき事なるを、人のきよめいを申をみかともことゝおほしめし、えいりよにそむく事、くちおしきといふ事を、ゆめにも人にあはぬなりけりと、くかいへ⁽¹⁷⁰⁾「ちんする心、又みかとへもつうすへし。しやうくわん十七ねん五月のつこもりなり。ふしの山を見ればゆきいとしろうふれるとは、

ときしらぬ山はふしのねいつともかのこまたらにゆきのふるらん

ときしらぬ山は、ふしはゆきのふる山なれば、なつといふときをもしらぬ也。かのこまたらは、しろくあかき物也。ふしのつちはつねにあかし。此うへにゆきのむらきえたるは、ほしのいたるかのこまたら也。又いはく、こちうには、ふしを見ればとは、みかを見奉ればといふ事也。みかとはふしは、三ヶ国に⁽¹⁷¹⁾「ならひなければ、みかをとふしにたとへたり。ときしらぬとは、せいわたわう、うれいもなく三十七としのさかりにゑたいをうけ給へは、ときしらぬみかといふへきを、ときしらぬふしといふ也。かのこまたらは、御代のかはるにつきて、ゑたいとけたるは、いるいもしろく、又御代かはるをなけく人は、にしきのはかまきたる人なともおとろきて、きんちうのさくはくやうたい、かのこまたらにゆきのふるらんとよめる。ふし

の山のふんきを人のたつぬるとき、てをあけてもまなふにおよはねは、ひえの山をはたはかりかさねあけたらんほと也。なりはしほしりのやうなるとは、⁽¹⁹⁾「しほたるゝかこ、ふしの山ににたり。此かこは、いかにも口いかりて、そこほそなかき也。ふしの山のてい、いかにもそはへひろく、うへはせはくほそなり也。しかれはしほしりをうつふけにほすににたり。すみた川は、むさし、しもつさ、りやうこくのなかなかるゝ也。かきりなくとをくもきめるとは、なりひら、みやこよりかくのことくをんこくまできたりたりと、おとろかるゝ事也。わたししもりとは、くわんはくとのゝ御事也。いかにといふに、きみをふねといふによりて、くわんはくは、みかたとをすいにあつかふによりて、わたししもりといふ也。はやふねにのれとは、せい⁽¹⁹⁾「わゝ御代をすへられたり。此たひのみかとへまいれといふ事也。日もくれぬといふは、みかたとを月日にたとへたれは、せいわの御代をすへられたるを、日もくれぬといふ也。のりてわたらんとは、又よつきのみかとへまいらんといさむ也。みな人物さひしきとは、御代のかはるをなけくもあり。なりひらはいさむ也。さやうにおもふ人なきにしも、いはんやなりひらはおもふ人きやうにあれば、いよくよろこぶ也。まつとうりうには、かもめをみやことりといふと見えたり。はしとあしとあかきは、かもめのやうたいなり。しろきとりはみかとの御かたちをほめたる也。これを⁽²⁰⁾「みやことりといふ事は、まつみかとは、かみ十五日まつりことをなさるゝによりて、あしにはにしきのはかま、口にはにしきのくちおほひをめさるゝなり。しかれははしとあしとあかき也。これみやことりのさた也。わかまゝの御あつかひなれば、てんしをとりと申也。ことに此ようせい天わう、せいわの御代をはやくとり給へは、みやことりとやうせい天わうを申なり。みつのうへにあそふは、みかたとをふねといふにより、みつのうへはふねのあそふところ也。きやうには見えぬとりとは、きやうにうみなし。かもめはうみによりほかはなし。かもめをみやことりと、とうりうに⁽²⁰⁾」

いふ也。みな人みしらすとは、此ほとやうせいは、さかの野のおくにましゝて、けふ御くらいまいるによりて、はしめてみやこへいて給ひたり。

なにしをはいさこととはんみやことりわかおもふ人はありやなしやと

なにしをはとは、みやことりといふなのことくならは、二てうのきさきはきんちうにましますか、又いかやうのところにましますといふ事を、わかおもふ人はありやなしやと、みやことりにとはれたり。しきのおほきさといふ事、とうりうには、かもめをいふと見えたり。ふしゆひ也。かもめ、しきよりは⁽²¹⁾「るか大なる物也。又こちうのせつには、しきのおほきさといふは、たいとうにしきわうと申わうあり。そのみかと御よをよくおさめ給ふ。やうせいもかくのことく、しきわうにあやかり給へとしうけん申也。

第二 隙 むさしのくにまでまどひありくとは、とうりうには、むさしのくになり。こちうは、ありつねはむさしのかみになりたり、それかもとにちうしやうありし事をむさしのくにまでまどふといふ也。そのくにある女とは、きのありつねのむすめ也。ちゝはこと人にあはせんといふは、なりひらはくらいたかければむこにあはす。われにさうとうのむこをねかふなり。⁽²²⁾「はゝなんあてなる人といふ也。はゝなん人に心つくとは、なりひらくらいたかければ、あてなる人といふなり。らうほは、女のおもひてになりひらをこそむこにほしけれとねかふ也。ちゝはなを人とは、しやうしきなり。しやうしきのしきのちを、なをとよます也。ありつねは、わかみのいやしけれは、いやしきむこをとねかふはしやうしき也。はゝなんふちはらなりければ、此はゝはふちはらのたかみつかむすめ也。しからはわかくらいある物のむすめなれば、又むすめにくらいあるなりひらをむこにねかふ也。むこかねとは、きようなるむこ也。物をほむるに、しやきんのことくといふ故⁽²²⁾」なり。すむところいるまのこほり、みよしのゝさとに、八月一日にま

つりをする也。此まつりをは、たのもののまつりといふ也。

みよしのゝたのむのかりもひたふるにきみかたにそよるとなくなる

ひたふるとは、ひたすらになひくといふ事也。よるとなくなるとは、ゑんとなくなり。此たのもののまつりに、ねんちうにゑんしやを、この日をとしつくる也。よめかむこか、いつれもさたむるところのうらなひ也。まつむこのほしき物には、おとこを二人にんきやうにつくりて、かりかねのこのむゑをかの人形に(22)「もたせて、此あひたをかりかねのめをぬいてとはせて見る也。かりかねのとひつきて、ゑをくひたる人形を、やかてそのかりかねをそへ、むこにおとしつくるなり。ありつねはむこにすへきをいとふ也。らうほはなりひらとありし也。しかれはむこおちつかす、うらなひをもつておちつけへきとて、ひとりはなりひら、又へつのおとこをひとりつくりて、かりかねのこのむゑをもたせたるに、かのかりかね、なりひらのゑをとったり。さてはなりひらをおとしつくとて、ふうふなからよろこひ、そのかりかねをしうけん²³にそへ、なりひらのかたへをくる也。けふよりゑんしやになるうへは、なに事も(23)「へつてうあるへからす。ひたふるにきみかたにそえんとなくなる」といひて、なりひらをさためたり。かのむこかね返し、なりひらのことなり。

わかかたによるとなくなるみよし野のたのむのかりをいつかわすれん

かりかねのなさをよろこふ也。さるほとに、かりかねにはうらなひをもつけへし。なを人のくにてもかゝることなんやまさりけるとは、なりひらかふちやう心、たこくにてもやまさる也。

第十一 段 昔おとこあつまへ行とは、ひかし山へなり。とうりうには、むさし也。みちよりともたちにいひやるとは、さ(24)「まのかみたゝもと也。是をもつて二てうのきさきへ哥をしんする也。」

わするなよほどは雲居になりぬともそらゆく月のめくりあふまで

ほとはくもいになるとは、きさきの御くらいたかくなり給ひし事を、ほどは雲居になるといふ也。かくのことく十せんにてましませは、われゝか事をおほしめす事あるへからす。しかれはくらいたかき人も月を見る也。われはひかしのあつまにさふらへは、もし月を御らんせんとき、なりひらのかたより月はいつとおほしめせ。われも又月かたふかは、に(24)「しにきさきましますとそんすへし。しかれはわするなよと、きさきの御かたへ申也。」

第十二 段 昔男人のむすめをぬすむとは、なからのきやうの御むすめ也。このきさきをぬすみ奉り、むさし野へゆく也。くにかみからめらるゝとは、せいわたわう、なりひらを御せつかんあり。女をはくさむらのなかにおきてにくるといふは、むさしのゝ事なれば、くさむらといへる也。みちくる人とは、くにつね、きさきの御きやうたい、なりひらをうちとめんとて、おいてにかゝり給ふ事を、みちくる人といふなり。此野はぬす人のあるなりとて、くにつね火をつけん(25)「とし給ふ也。此ひつけんとするに、しさひあり。きさきにおもひのひをつけんとする也。そのゆへは、きやうたいたちのいて給ふをきこしめし、きさきもえたつばかりはつかしく、又おもはゆくまします事なり。きさきの御うた、

むさし野はけふはなやきそわか草のつまもこもれりわれもこもれり

きんちうにむさしのあり。そのゆへは、昔大なごんみさひまろといふものあり。むさし廿四くんをちきやういたし、ゑいくわにありつるところに、えいりよにそむくあひた、此くにをめしはなされたり。しかれはかのみ(25)「さひまろ、みやこへのほりさまゝに申せとも、御めんなし。是をふうふのもののなけくあひた、やまひとなりて、ふうふなからしす。こともをちかつて、むさしのくにのつちをとりよせ、とさうしてえさせ

は、むさしをもつとおもふへしとゆいこんして、しつたり。かのこともゆいこんにまかせて、むさしのつちをめしよせ、ふうふをとさうしたり。此ところをむさしのといふ也。又たいりをみやこへうつさるるとき、此の大りの庭になりたり。しかればひつけんといふことはをうけて、きさきむさしのはけふはなやきそとあそはしたり。此のはむかしより、ふうふをさうして、ひをつけさるところ也。こらいのきをそんして、けふはなやきそ、昔もふうふ、いまわれもなりひらとふうふこもれば、火つくる事やめよといふ御うたなり。

第十三段 昔むさしなるおとこは、ちうしやう也。きやうなる女とは、ゆきひらのむすめ四てうのきさき、中將のためにはめい也。さてこそえいりよにそむくこと、きさきゆへなれば、わかめいにきかする事はつかしき也。又きこえねはくるしとは、ありところをしらせぬもあひたによりて心くるしき也。うはかきにむさしあふみとかゝれたるは、はなれさるあひたといへる事也。そのうちおとつれなし。しかればきやうより女、四てうのきさきの哥、

むさしあふみさすかにかけてたのむにはとはぬもつらしとふもうるさし

むさしあふみとは、もとよりはなれさるあひたといふ事也。かけてたのむとは、たかにいたのみたのまるゝをちとめいのあひたなり。とはぬもつらしとは、をとつれなきときも、なに事かましますらめとおもふときは、とはぬもつらしといへる也。又とふもうるさしとは、そなたはえいりよにそむきたる人なり、われはきんちうにあれば、よをはゝかるによりて、とふもうるさしといへり。うるさしといふ事、兄弟もちたる人はいむへし。昔もろこしに、右大臣、さ大しんきやうたひあり。う大しんはなかされ、さ大しんはしさいにおこなはれたり。しかれはうるさしといふ事おこりたり。おとこたへかたき心ちとは、なりひら返しにをよふましきと思へとも、かくいひをこせたるに、返しをせてはかんにんしかたきなり。さて返哥、

とへはいふとはねはうらむむさしあふみかゝるおりにや人はしぬらん

とへはいふとは、たつぬるときはうるさしといふ。又とはさぬときは、とはぬもつらしとらむれば、せんかたもなし。たかひにとひとはれてこそ、とうかななきいしゆもあらはるゝに、かくのことくいへはくちおしきなり。昔の人のこひにしぬるといふを、いつはりとおもひたれば、かゝるおりにや人はしぬらん、われもいましぬはかりになりたり。

第十四段 すゝろとは、おもひのほかなり。なりひらみちのくまてくたる事、まことにふりよ也。そこなる女とは、へつにかやうなる女にてかあるらん。せちにおもへるとは、ふたつなくおもへる也。女のうた、

なかゝにこひにしなすはくわこにそなるへかりけるたまのをはかり

たまのをはかりとは、そこはかりといふ事也。くわこは、かいこなり。もしこひにしかねうきよにあらは、くわこになるへきと也。そのゆへは、くらいあるなりひらによりそふへき事はをよひなし。されともくはこになりてはやすかるへし。きぬにたになるならば、なにゝなりてもよりそふへし。又ひいるといふむしになりてむまれかはり、としくのさんくわいもやすかるへし。たまのをはかりほんいとけ、やかてふつくわにいたるへき也。是はどうりうのき。こちうには、むかしはんこ大わうの御むすめ、るいなき御かたちにてありしを、みかとの御ひさうにあしけのむまあり。かの馬ひめみやを見奉りてよしなきおもひとなり、此馬しつたり。みかとむまのかたみに見んとて、おもてにかはをはらせ見給ふに、あるとき、ひめきみなに心もなく御ゆさんとて、にはへ御いてありければ、はりつけたるかはおきあかり、ひめみやのうへにかさなると見えしかは、にはかにあしけのさうやくになられたり。しんかとも、くわの木はらにをしかくしたりければ、くわの木をふくして、大ようにはきぬをなしたり。わか身よりいつるきぬをあしにて

ふみかためければ、きぬのまきめはむまのつめに³⁰²にた
り。きぬを一疋、二ひきといふも、むまよりおこる儀也。かい
このつら、馬ににたるも此いしゆ也。しからは昔もかいこにな
りてむまもほんいをとけたり。われもなりひらによりそふへき
は、くはこにそなるへかりけるとよめる。うたさへひなひたる
とは、うたさへいやしき也。さてこそいやしきひなのすまひと
いふ也。さすがにあはれにやおもひけん、なりひらゆきてねた
り。おとこ夜ふかくいてければ、女わひて、

夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたきになきてせな
をやりつる

またきになくとは、にはとりのはやくなく事也。³⁰³「あふ
しうには、おとこをせなといふ也。又人のい糸を二云也。しか
れともくたかけとは、い糸のにはとりなり。よもあけは此とり
ともを、きつねにはませはやと、あかつきのとりをにくむ也。
そのいはれは、そひたきおとこ夜ふかにかへる事、にはとりの
しよきやう也。しかれば此くわたいに、きつねにくわせはやと
也。おとこきやうへなんまかるとて、

くりはらのあねはのまつの人ならはみやこのつとにいさと
いはまし

なりひらきやうへのほるとて、此女になこりおしみて、あねは
の松といふ事、たつひとつある松也。³⁰⁴「此まつのことく
此ねうはうもひとりあるならは、みやこのつとにいさといはま
しを、是はけんそく、ふるひおほくありて、きやうにもかる
く」とあつかひにくければ、さてこそあねはのまつのことくな
らは、みやこへつとにいさといはましをとねかふなり。

第百一十段 なたうことなき人の女とは、なんそくせもなきよき
女の事也。あふしうのくに、きやうたんにて、なに事なきとい
ふへきを、なてうことなきといへり。あやしき事もなく、心も
おもてのことくしやうしきに、心にふしんもなく見えはんへる
也。しからはちすしをわけて、ふくちうへゆくみちな。よく
く³⁰⁵「心のうちを見たきとなり。」

しのふ山しのひてかよふみちもかな人のこゝろのおくもみ
るへく

心のうらおもてなくはんへるを、しのひてかよふみちもかない
よく人のこゝろのおくを見たきとなり。かきりなくめてたし
とおもふは、なりひらにかくのことくほめらるゝは女のほんい
なり。されともなりひら、ゑひす心なれば一かたにはさためか
たし。さてこそゑひす心みてはいかゝせんとなけくなり。ゑひ
す心とは、心のさたまらぬうつりやすきをいふなり。³⁰⁶

第百一十六段 昔きのありつね三代のみかたとにつかふまつとは、
しゆんは、にんめい、もんとくなり。此みよには、ありつねえ
いりよにあひかなひ、てんかを心のまゝにしたかへり。しかれ
はときめくといふ也。のちはよかはりときうつるとは、四たい
めのせいわの御とき、えいりよにそむき、きのふはしたしかり
しも、みかとおそれ、ありつねにうとくなる也。よのつねの
人のことくとは、つねの人よりもおとろへたり。人からはいつ
くしうとは、もとよりくらいある人なればさういなし。あては
かなる事をこのむとは、しよけいにもくらいある事はかりをこ
のむ也。まとし³⁰⁷「くへてとは、ひろうにしてもくかいは
よかりし。むかしのことく、ふへんの事をしらす。しかるあひ
たとしころあひなれたる女とこはなるゝとは、ふへんのあまり
にりへつなり。つぬにあまになるとは、さまをかへたる也。あ
ねのさきたちてなりたるところとは、此女のあね、さかのおく
にさうあんをむすひてありし也。それをこそはこくみつるに、
いまはひきかへてかあねをたのみてゆくなり。おとこまこと
にむつまじき事なしとは、なつかしきしうしんもなし。よにあ
るときのわかれば、かねをうらみ、とりをうらみてむつまじか
りつるに、³⁰⁸「このときのりへつは、せちやうめんほくも
なきまてなり。いまはとわかれてゆくをいとあはれとおもふと
は、ふたつなくあはれなり。まとしければとは、ひろうなれは
するわさもなきなり。ねんころにあひかたらふともたちは、む
こなりひら也。そのかたへ此りへつの儀をしらせらるゝ也。な

に事もいさゝかなる事なきとは、すこしのうらみもなきと也。
そのおくに哥、ありつね、

手をおりてあひみしことをかそふれはとをといひつゝよつ
はへにけり

かのきうさいにしたしかりつるとし月を、手³³²を「おりて
見れば、とし月四十ねん也。かくのごとくのきうさいにりへつ
する事おもひやり給へと、なりひらにつくる也。しかればかの
ともたち、よるのものまでとりそへおくとて、

年たにもとをとてよつはへにけるをいくたひきみをたのみ
きぬらん

とし月は手をおれば四十ねんといふかきりあり。えんしやにま
いり、御かけをあをきたる事、かすくの儀なれば、ゆひもお
られす。いくたひきみをたのみきぬらん。そなたかやうになり
給ふ事、われ一人のなけき也。かくいひやりたりければ、³³²
「

これやこのあまのはころもむへしこそきみかみけしとたて
まつりけれ

みけしは、きよいなり。わうしん天わうの御時、くれはとり、
あやはとりとて、二人のてんによくたりて、御衣をおりてみか
とへまいらせたり。それはいにしへの事。なりひらよりのよる
の物までおくり給ふ事、まことにこれやこのあまのはころもと
よろこぶ也。よろこひにたへて、又ちうしやう、

あきやくるつゆやまかふとおもふまであるはなみたのふる
にそありける

かんるいのなみたのつゆ、たもとにかひたり。なり³³²「
ひらのよるのものを、あまのはころもとよろこはれたるを、な
りひら、あはれありつねよにありしときならば、このこそた
と、なにしにあまのはころもとよろこはれへき事にはあらず。
かくのごとくありしをきつて、かんるいをもよほさるゝ也。
第十七段 此たんにむかしのなき事はしさいあり。此物かたり
は、いせといふ女つくりてかきたり。此哥二しゆをかきおとし

て、こきんにあるをていかのちにかきくはへらるゝとき、いせ
におそれて、昔といふしをおかれぬ也。としころをとつれさり
けるとは、なりひら三とせしうとのきのありつねのかたへいて
³³²「いりせす。そのときはせいわのえいりよにそむくあひ
た、くかいをおそれゆかず。三ねんのちせいわゑたいになり
給ひて、やうせいの御よになりたり。しかればくかひひろく、
ありつねのところへさくらさかりにゆかれたり。きのありつ
ねよめる、

あたなりとなにこそたてれさくら花としにまれなる人もま
ちけり

花はあたなりといへとも、三とせこさるまれ人をまちうけたれ
は、花はあたにはあらず。されは三とせまちてもつゐにそのき
なし。けふもわたくしの心さしにはあらず。花ゆへなりひらき
たりたると、³⁴²「ありつね、ちうしやうをうらむる也。返
し、

けふこすはあすはゆきとそふりなましきえすはありとも花
と見ましや

わたくしは花を見にはさんせす、ひとへにこれへの心さし也。
わたくしけふこすして、しせんあすまいりたらは、此さくらゆ
きとそふりなまし。しからは花といふ物あるへからず。またき
よねんのゆきの花はいまたきえすしてのこりたることゝ、人は
見ましや。さてはあすもあるへき物をと、なりひらあいさつな
り。

第十八段 なま心とは、やさしき心也。おとこちかうあるとは、
なり³⁴²「ひらとこまち、あひたちんしんなり。心みにとて
おとこのもとへきくの花のうつろへるをやる事、なりひらの心
をこまちひき見へきため也。きくの花のうつろへるをおしむ哥
をよみてはんへらは、われにとうかんならば、此きくのうつろ
へることく、かくこのかわるといふ事と心えちんしやの返哥を
よまるへし。

くれなひにほふはいつらしらきくのえたもとををにふる

かともみゆ

えたもとをうとは、えたをとをくはなれてきくのちる心也。此ことくなりひらのわれにうとくならるゝか。いつかたへか御心のふりゆくとおもひて、くれなひ⁽³⁶²⁾「にほふはいつらとふしんのうたをよむ也。おとこはしらすよみによむとは、わかさもなきとちんする哥をよまは、とかちんはうにあるほとに、わか心のあやまるににたり。その心にはとりあはず、きくのうはさはかりよめる。

くれなゐにほふかうへのしらきくはおりける人のそてかとも見ゆ

よの中に、くれなひはめにたちてみことなる物也。此うへはあらしとおもへは、又しらきくといふ物、くれなひのうへ也。此しらきくにたとへへき物は、こまちのすかた也とほめて、おりける人のそてかともみゆ⁽³⁶²⁾「といへる也。こまち、さてはわかすかたをほめらるゝはへつてうなきとこゝろへる也。

第九段 むかしみやつかひしけるとは、二てうのきさきに宮つかひ奉るねうはうの事なるへし。こたちなる人をあひしるとは、是は人のこともたちとしやくわん也。これはきのありつねのむすめなり。なりひらこれにちきりをこむる事あさからすほともなくかれゝとは、ほとなくりへつ也。おなしところなるとは、おなしきんちうの事なれば、りへつとはいへともたさる事なし。女のめにはみゆるとは、うちよりもよそを見いたすはたやすし、⁽³⁶²⁾「又ほかよりうちを見る事は、しりよなれば、なりひらはうちも見る事なし。女のうた、

あまくものよそにも人のなりゆくかきすかにめには見ゆるものから

あまくものはこゝにふるとおもへとも、又とをくふる物也。なりひらもこゝにありともよりそはねは、あまくもなり。さらは一かたにもとをくならて、おなし大りのうちなれば、さすかにめにはみゆる物から、さすかきるにもきりゑす、なりひらをみればこひしき也。おとこ返し、

あま雲のよそにのみしてふることは⁽³⁶²⁾「わかいる山のかせはやみなり

あま雲のことく、われもよそにふるへきはあらねとも、みかとの御せいはいけしければ、それにおそるゝによりて、よそにのみしてふるなり。あま雲もかせにしたかひ、ひとつころにありかたくとをくゆく物也。わかいる山は、大りおほうち山也。かせはやめは、みかとの御せいはいにおそるゝ也。しかればとうかんのやうに見えたり。心にふきたなきといへる也といひける。またへつにおとこある人となんいふ也。へつにあるおとことは、みかと此女に御こゝろあり。⁽³⁶²⁾「

第十段 やまとのくにゝある女とは、きのありつねのむすめ也。よはいてあふとは、しのひてさんくわいなり。さてふうふとなりてほとへてのち、又きやうへ宮つかひにのほる也。やよひはかりに、かやてのはつもみちを見いたして、そのもみちにつけてきうさいのもとへうたをおくる也。みちよりもいひやるとは、やはたよりの事也。やはたは、きやうとやまとのほんと也。

きみかためたをれるえたは春なからかくこそあきのもみちにけれ

此もみちもあきこそあるへきに、おもひのほか⁽³⁶²⁾「なるやよひにあるもみちは、まことにさためなきことなり也。此もみちのことく、るすちうに御こゝろいかやうにかうつりかはるへき。此さためなきもみちを見るにつけても、御心おほつかなしきみかためたをる心は、はるのまゝにかはる事なしといひつかはしたり。返しは、きやうにきつきて、やまとよりきうさい返哥もてきたる。

いつのまにうつろふいろのつきぬらんきみかさとははるなかるらし

きみかさとははるなかるらし。われをはやあきになされたりと見えたり。いつのまに御かく⁽³⁶²⁾「こうつりかはりたるよ。そのはうからのもみち、おもひのほかなる事なれば、そなたは

われにとつかんかとうらみてよめる。

第十一段 むかし女はかしこくおもふとは、こまちをなりひらねんころにする也。こと心なかりけるとは、なりひら、こまちにへつてうなし。いかなる事かありけん、いさゝかなるきに、こまちなりひらをうらむる也。こまちかうた、

いてゝいなは心かろしといひやせんよのありさまを人はしらねは

というのことは、いさゝかなるうらみと人はおもふ也。(382)

とし月のないきにうらみあるを人はしらねは、わかいてゝゆけは、しよ人心かろしとわかあたたつへし。しかれともよのつねならぬないきにうらみはんへは、いてゝゆく也。此哥をかきつけてこまちゆきたるに、此哥をなりひら見つけて、さてもかくこにへつてうなきを、なにゝよりて此あつかひおほつかなき也。けしう心をくへきとは、けしうはいやしき也。いかなれば、いやしけに心をくへきにもあらず、たかひにいとまをこひて、のり物にてもゆかぬそと、なりひらいたくひたん也。しかれともいとゝなくといへる也。いつくにもとめ(383)「ゆかんとは、こまちはやくゑをちうしやうたつねんとのき也。かといいてゝとみかうみ見るとは、こまちはやくゑを、かなたこなたをなりひらたつねらるゝき也。いつくをはかりともおほえねは、かへりて、

おもふかいなきよなりけりとし月をあたにちきりてわれやすまひし

とし月はおしめともおもふかいなく、くわういんやのことしとてくれてゆく物也。こまちをねん比にしたるは、とし月をおしむことく、こまちはかくこきよくなしと、こまちをかみのくはうらみて、(384)「下のくに、あたにちきりてわれやすまひし、さためてみにとつておほえねとも、わかかくこにもあたにちきりてすみたる事あるへし。こまちはかくこはかりちかふにはあらす。わかかくこもちかふたるへきとて、こまちはかうりにおとしつくる也。又ちうしやうの哥、

人はいさおもひやすらんだまかつらおもかけにのみいと見えつゝ

人はいさとは、こまちはわれをおもひやすらん、又おもはてあるらん、いさしらす。われはこまちにたいし、とうかんなけは、こまちはおもかけを、ゆめにも(385)「うつつにもこれはかりを見るといふ事を、おもかけにのみいと見えつゝとよめる。たまかつら、女の惣みやうなり。此女いとひさしくねんしわふるとは、こらひわふるなり。こまちかうた、

いまはとてわするゝくさのたねをたに人のこゝろにまかせすもかな

わすれくさのたねを、人の心にはまきたくもなし。しかれはわが事をわすれくさに、なりひらなさるへし。わか心におすれくさのたねをほしきと也。ちうしやうこひしきしうしんを、わすれくさになすへきと也。さてこそ、わすれくさ人の心にまかせ(386)「すもかなとねかふなり。又おとこ返し、

わすれくさうふとたにきく物ならはおもひけりとはしりもしなまし

是はわすれくさのたね、こまちはかくこにうへさる事あらはれたり。しかれはわれをおもひけりとはしられしを、わすれくさのたねなきによりて、われをおもひしゆあらはれたり。又くありしよりけにいひかはすとは、もとよりもすくれてあひたよくなる也。すくるゝといふしを、けにとよまするなり。なりひら、

わするらんとおもふ心のうたかひに(387)「ありしよりけに物そかなしき

此あひたは、われこまちにふさたしたり。いまは又こまち、われをすつるやと、しうしんふかきによりて、ありしよりけに物そかなしきとよめる。返し、こまち、

なかそらにたちあるくものあともなくみのはかなくもなりにけるかな

なかそらのくもとは、うみにも山にもつく雲はたよりあり、は

はす。みなしことなられたらば、いよ／＼まへ／＼よりねんころありてこそ、くかいしかるへき也。此もとの女あしとおもへるけしきもなくいたしあるとは、ちうしやうのきうさい、なりひらかわちかよひをするに、あしといふけしきもなく、いよ／＼ねんころにかわちへいたしやる也。こと心ありてやと、ちうしやうおもはれける。かわちかよひにふきやうのけしきなきは、わかるすにへつてうのかくこありとおもはれたり。さるほとにかはちへゆくよしにて、せんさいにかくれて女のかくこ⁴⁵²「⁴⁵²」を見るに、へつの心はなく、いとようけそうする。まゆをはきかねをつけ、ちうしやうのみちのきとうを、此女心にいとむ也。そのゆへ女といふしうへに、かふりといふしをかは、やすしといふし也。かふりなくて女といふしは、人ほろふとよませたり。しかれはいとようけさうするは、ちうしやうのみちのきたうなり。かの女の哥、

かせふけはおきつしら波たつた山よはにやきみかひとりゆくらん

むかしたいたうよりしてぬす人二人きたり。一人をはりよくりん、ひとりにはくらう、この二人のぬ⁴⁵²「す人、やまとかはちのさかいにふして人をはきとり、人をころしらんにうする也。此あくしよをとをりて、ちうしやうかわちへゆかるゝに、女あしとおもへるいろはなく、ちうしやういつの日のいつのときか、さいなんにあはれへき事をおもひやりて、おきつしらなみたつた山よはにやきみかひとりゆくらんとなけかれたり。なりひらこれをきゝて、かきりなくかなしとおもひ、われなからわか身をあさましくおもひ、女の心をはちて、かわちかよひをおもひとまり、もとの女におもひつく也。これ女ほうのめいしんにより、なりひらのかくこをもとゝのふる也。まれ／＼たか⁴⁵²「やすにきて見るとは、さい／＼きてみる也。はしめ心にくゝもつくととは、此女うちつけはきやしやをつくりたれとも、しやうとくいやしき女なれば、したいにほんしきのいやしき心あらはれ、てつからいひかいとりて、けこのうつはもの

にもるを見て、中将心うかり、かわちかよひをやめられたり。しかれば此女、なりひらのすまるゝやまとをみて、

君かあたり見つゝおをらにいこまやま雲なかくしそあめはふるとも

中将のかたの雲をなりともかたみに見はやおもふに、なみたのあめかきくもれば、かたみの雲さへ⁴⁵²「めに見えす、いよ／＼ちうしやうこひしき也。やまと人からうしてこんといふは、しんらうしてくへきとなり。よろこひてまつに、たひ／＼ちうしやうこさりければ、女のうた、

きみこんといひしはかりにすぎぬれはたのまぬものゝこひつゝそぬる

中将われをたのまぬ物也。われはちうしやうをたのみてこひつゝそぬる。かたおもひなりとはいひけれと、おとこすますなりとは、なりひらこす。

第十四回 むかしおとこかたにすむとは、やまとのくに也。わかれおしみてみやつかひにいてゝのちなりひら⁴⁵²三とせかへらす。まちわひたりけるとは、もとより中将をまちわひたる也。いとねんころにいふ人と、こよひあはんと此女しゆひしたり。此いとねんころにいふ人は、せいわの御こつねやすのしんわう。なりひらこすはちきらんと御しゆひあり。はや三とせこさりければ、さらはといひて、つねやすのしんわうにあいたいする也。昔はおとおんなのしゆひは、三ねんをかきりにまちて、三ねんすくれはせひをいはず、女別の物にあふなり。つねやすのしんわうとねたるに、此おとこきたりけるとはちうしやうきたり。此とあけ給へとちうしやうたゝく也。しからはうちより⁴⁵²「哥をよみていたす。

あらたまのとしの三とせをまちわひてたゝこよひこそにひまくらすれ

此女三とせのしゆひなるを、こよひ一よまちこしては、しゆひにまかせてよかるへきを、一よまちかねてこよひさんくわいする也。あすのよは人にあひてもくるしからず。たゝこよひこそ

にいまくらすれ、まへくはさもなかりつるとちんすれとも、此おとこまことにせず。中将かへらんとおもひて、

あつさゆみまゆみつきゆみとしをへてわかせしかことうるはしみせよ(482)

ゆみを三ちやうあけられたるは、三ねんの三しゆんをいふへきためなり。わかせしかことうるはしみせよは、われにせしかことくこれにちきせ、われは二たひこしとよめる。又女返し、あつさゆみひけとひかねとむかしよりこゝろはきみによりにしものを

ひけとひかねといふは、おさなきときはまた心もひきてひかれず。しからはそのときよりなりひらとみつからは、いまたふさたなきなり。むかしより心はきみによりにし物を、女はおつとにあはさるは心ほそき物也。いまもむかしのこゝろ、心はきみによりにし(483)「物を、かの女おとこにこんはう也といひければ、おとこはかへりぬ。女しりにたちてをひゆけとも、女は男におとるによりて、中将にをひつかず、せいすいのある所へふしたり。そなるいはに哥をかきつけける。

あひおもはてかれぬる人をとゝめかねわか身はいまそきえはてぬめる

あひおもはぬとは、わかちうしやうをおもへとも、中将われをおもはず、しかれはかたおもひ也。かれぬるとは、りへつ也。わか身はいまそきゆるとて、しやくその四くのもんをかかれたるこゝろ、おゆひのちしてかきつくるなり。(484)

第十五段 むかしおとこあはしともいはさりける女とは、こまちか事也。あはしともいはぬは、もつともさんくわいといひて、さすか又うちとけもせぬ也。ちうしやう、

あきの野にさゝはけしあさのそてよりもあはてぬるよそひちまさりける

あきの野のさゝはけしたもとは、あさからすぬるゝ也。それよりもおもふ人にあはてぬるよ、たもとのぬるゝは、さゝはけし袖にはまさる也。ひちまさるはぬれまさるなり。又いうこのみ

の女返し、

見るめなきわか身をうらとしらねはやかなてあまのあしたゆく(485)

こまちか返し、みるめなきとは、さんくわいもなき事也。うらとおきたるはみるめのゑんこ也。かれなてとは、たえずあま人のゆきかよふ也。あしたゆくくるとは、あしのたるきほとゆきかよふ也。此こゝろなりひら、こまちかところへいてる也。

第十六段 むかしおとこ五てうあたりなる女とは、二てうのきさき、えゝすなりにける事とは、えかたき女の事なり。わひたりける人とは、そめとのゝきさき、なりひらか二てうのきさきをとてえかたき女なるを、しうねんをやめよかしと御わひことあり。しかれとも中将うたをもつて御返し申、(486)

おもほえずそてにみなとのさはくかなもろこしふねのよりしはかりに

かくのこゝろおほせあるへきとは、ゆめくおもはずとなり。もろこし舟、にほんのみなとへつけは、たからよるあひた、みなともきふくよろこひさく也。そのこゝろ、そめとのゝきさきの御わひことをうけたまはつて、心のうちもろこしふねのよりしはかりにとさはく也。

第十七段 むかしおとこ女のもとに一よゆきて又もゆかぬとは、これは二てうのきさきへもゝよままりたく侍れとも、よをはゝかるあひた、一よゆきて又もゆかず、(487)「心はしうしんはかり也。きさきもおなし御心也。女のであらふところにぬきすをうちあるは、はんさうたらいのうへに、わたしといふ物をうちわたし、そのうへに三くそくをおき、かねをもつけ、てをもあらふなり。かねつくるときの三くそくは、しやうつ三わ、ひとつはちやうつこの、一はふしかね入もの也。そのわたしのしたのみつをぬきすといふ也。たらいのかけに見ゆるとは、二てうのきさき、わかおもかけみつにうつるを、よの人のあるこゝろへて、

われはかり物おもふ人はまたもあらしとおもへはみつのし

たにもありけり (515)

せしやうになりひらゆへ物おもふ人は、われひとり也と御なけきありつるに、みつのしたにも人のあるを御らんして、わかおもひをなくさませ給ふ也。かのこさりけるおとは、なりひら也。此男たちきつて、

みなくちにわれや見ゆらんかわつさへみつのしたにてもろこゑになく

みつのしたにもあるとうけたまはるは、われやみゆらん、きさきの事をおもひしつみ奉るあひた、みつの下にてかわつとわれと、いつももろこゑになきくらふるなり。みなくちとは、みつくちのかわつひとつなけは、たことのかわつもろこゑになきたつ也。 (516)

第十八段 むかしいろこのみなる女いて、いにければ、こまち、ちうしやうをうらみていて、はしる事也。ちうしやうのうた、

なとてかくあふこかたみになりけんみつもらさしとむすひしもの

なとてかくとは、なにとてかくのことく、こまちかくこうつりやすきそといへる也。あふこかたみとは、あふ事のかたき身になる也。まへくよりはみつもらさしとむすひしなかを、かくのことくなりゆく事、身にとりてはおほえす。

第十九段 むかしとうくうのとは、みかたたい／＼おかたすみ也。 (517)

こは、二てうのきさき、はなのかにめしあつけるゝとは、二てうのきさき、二十のかを三月ひとひになさるゝ也。そのひのやくをちうしやうにおほせつけられたり。かといふは、十くゝにあたる時、たんしやう日にかといふよろこひあれば、その人のいのちもななく、いせいもある也。ちうしやうの、その日のやくをうけたまはり、けふ一日はいかにもなか／＼れかしとねかふところに、けつくはやく暮ゆく也。いかにといふに、甘のかにあひ奉るへき事は、ふたゝひあるましき也。しからはけふ

のひのなこりおしくおもひ給ふ間、よめる。 (518)

花にあかぬなけきはいつもせしかともけふのこよひになるときはなし

はなをはいつもおしめとも、花は又らい／＼ねんも見する事あるへし。甘のかはけふばかりなれば、さてこそけふのこよひにるときはなしと也。

第二十段 むかしおとはつかなりける女とは、さんくわいのみちとをき也。女はそめとのゝきさき。

あふ事はたまのをはかりおもほえてつらきこゝろのなかく見ゆらん

たまのをは、いのちの事也。いのちほとみちかくすくなく物はなし。此いのちのことく、二てうのきさき (519)にさんくわいはみしかくすくなく物也。さてこそたまのをはかりおもほゆるとよめる。あふ事はすくなく、つらさのおもひはなかし。さてこそつらき心のなかくみゆらん、あふことはたまのをはかりとよめる。

第二十一段 むかしみやのうちとは、大りのうちの事也。こまちのつほねのまへとは、二てうのきさきのおつほねの前也。なりひらこゝをとるに、いせといふ女、ちうしやうを見て、とくしてくさはになるを見たらはよかるへきと、いせかなりひらをのろふなり。しからはなりひら、うたをもつてへんたうあり。

つみもなき人をうけへはわすれくさ (520)をのかうへにそあふといふなる

つみもなきとは、とかもなきと也。人をうけへとは、人をしゆせせはといふ也。かくのことく人をしゆせせは、又けんしやくおほんにんなれば、そのほうにとくして、へうしよよりもわすれくさおへしと、のろひかへす也。へうしよのくさを、わすれのくさといふ也。ねたむ女もあるとは、二てうのきさき、いせをよまひことあり。

第二十二段 むかしものいひける女とは、こまち也。こまち、

せきもりにあさましくなりて侍るを、なりひらあはれにおもひて、しつのをたまきのごとく、いま一たび(64)「くりかへして見はよとよめる也」といひければなにもおもはずやありけんとは、としのよりおとろへるは、われはかりにてもなし、人ことの事なれば、はつかしきともおもはずなり。

いにしへのしつのをたまきくりかへしむかしをいまになすよしもかな

とありければ、なにもおもはずやありけん。

第三十一段 昔おとこのくにむはらのこほりにかよひける女とは、きのありつねのむすめ、中將のためにはさいしよなり。しんふきのありつね、ならのこほりを地行して、これにしんふすまるゝあいた、おやの事なれ(64)「は、ちうしやうのさいちよ、さいくいていりあり。此たひゆくは、又かへるましきやうにけしきあしかりしかは、ちうしやう女の心をやはらげんとて、

あしへよりみちくるしほのいやましにきみにこゝろをおもひますかな

たかくしけりたるあしのまよりしほのみちくるは、めには見えぬ也。そのことく、いつものきうさいなれば、おもふふりをはうへにはあらはさねとも、しほのみちくることくに、いやましにたれよりもふたつなくきみをおもひますかな。いかにしてふきけんなるとよまれたり。返し、(65)「

こもりえにおもふ心をいかてかはふねさすさほのさしてしるへき

こもりえとは、くさのかけなとにたまりみつをいふなり。それはさほをさせは、ふかきあさをする也。なりひらの心にはさほもさつねねは、われにとうかんのあるなきもしられさると、けんそによみたり。いなか人のよしやあしやとは、うたの返しをしたるはよきことにてもあり、又あしき事にてもあるへし。すきたるはたらはさるにはしかし。おとこには女はまけたる事よし。

第三十四段

むかしつれなかりける女とは、四てうのきさき、ゆき(66)「ひらのむすめ、ちうしやうのためにめい也。さんくわいなき女なれば、つれなきとかきたり。中將、いへはえにいはねはむねにさはかれてこゝろひとつになけくころかな

いへはえにとは、さしいてゝこひしきといはんとすれば、えんきんの事なればいはれず、又はすしてつゝめは、むねのうちのおもひくるしき也。えんしやのあいたをおもへは、たへもらす事なし。さてこそ心ひとつになけくころかなといへる也。おもなくてとは、めんほくなくてといへる也。

第三十五段

むかし心にもあらたえるとは、おもひのほかに(66)「りへつ也。此女二てうのきさきにておはします也。たまのをゝあはをによりてむすへればたえての後もあはんとそおもふ

たまのをとは、すゝのをのたえてみたれたるは、二たひよりあひかたし、されともいとをよりあはせてむすへれば、すゝのたま、又一しよによりあふ也。これをみれば、わかなかも、りへつなりとも又あはんとそおもふと、すゑをたのまれたり。